Ⅲ　事業の結果（まとめ）

1　利用者について

(1)　小グループ活動全体について

①　自主性の創出

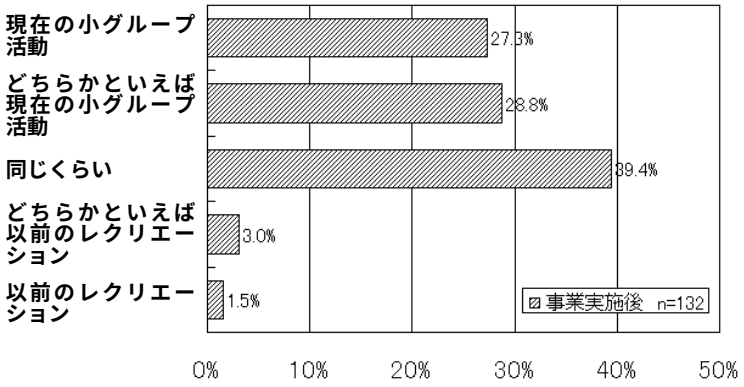
従来の職員だけで内容が決定された集団レクとは異なり、利用者の意思表示や会話が増え、それによって日ごろの小グループ活動の中で次回の活動内容の希望が出されて決定されるようになり、利用者の活動に自主性が生じた。

・「何かしたいことはありますか？」「とくにないです。」
・グループワークによりコミュニケーションが増大。

②　活動意欲の向上

小グループ化により、楽しみややりがいを多く感じるのみならず、多面性・発展性のあるきめ細かな活動が可能になり、利用者が活動内容に興味を持ち、その活動に打ち込む活動意欲が向上した。

どちらが楽しい・やりがいがあるか。



・同じ書道でも、活動が多様化。
・小グループの中で自分の役割を分担。

③　残存能力の発揮、自己実現

活動の活発化や意欲の向上により、あまり用いることのなかった身体機能や以前特技としていた能力を発揮するようになり、利用者自身が自らの能力に気づいて自信を持ち、楽しみややりがいを見つけて行動を起こすようになった。

・門松の作り方を教える。
・包丁や金づちが十分に使える。

④　心身機能の向上

身体、社会性、認知、感情に係る各面の機能が向上した。

※　**ＭＡＲＲＣＣ（Measurable Assessment in Recreation for Resident-Centered Care 施設入居者のためのレクリエーションアセスメント測定）の活用**

高齢者福祉施設においてケアの目的を持ったレクリエーションを実施するときに、施設職員によって身体的領域、社会的領域、認知・知的領域、感情・精神領域に分けて評価する観察尺度で、アメリカを中心に使用。

各領域ごとの１０項目の設問をチェックすることによって点数化（1.86点～-1.86点）され、容易に定量的な評価が可能である。

【調査項目の例】

①　身体的機能

○自主的に（介助の有無は不問）移動できるか、又は自力で車椅子を動かすことができるか。
○疲労が目立つことなく、１時間以上続く活動に積極的に参加できるか。

②　社会的機能

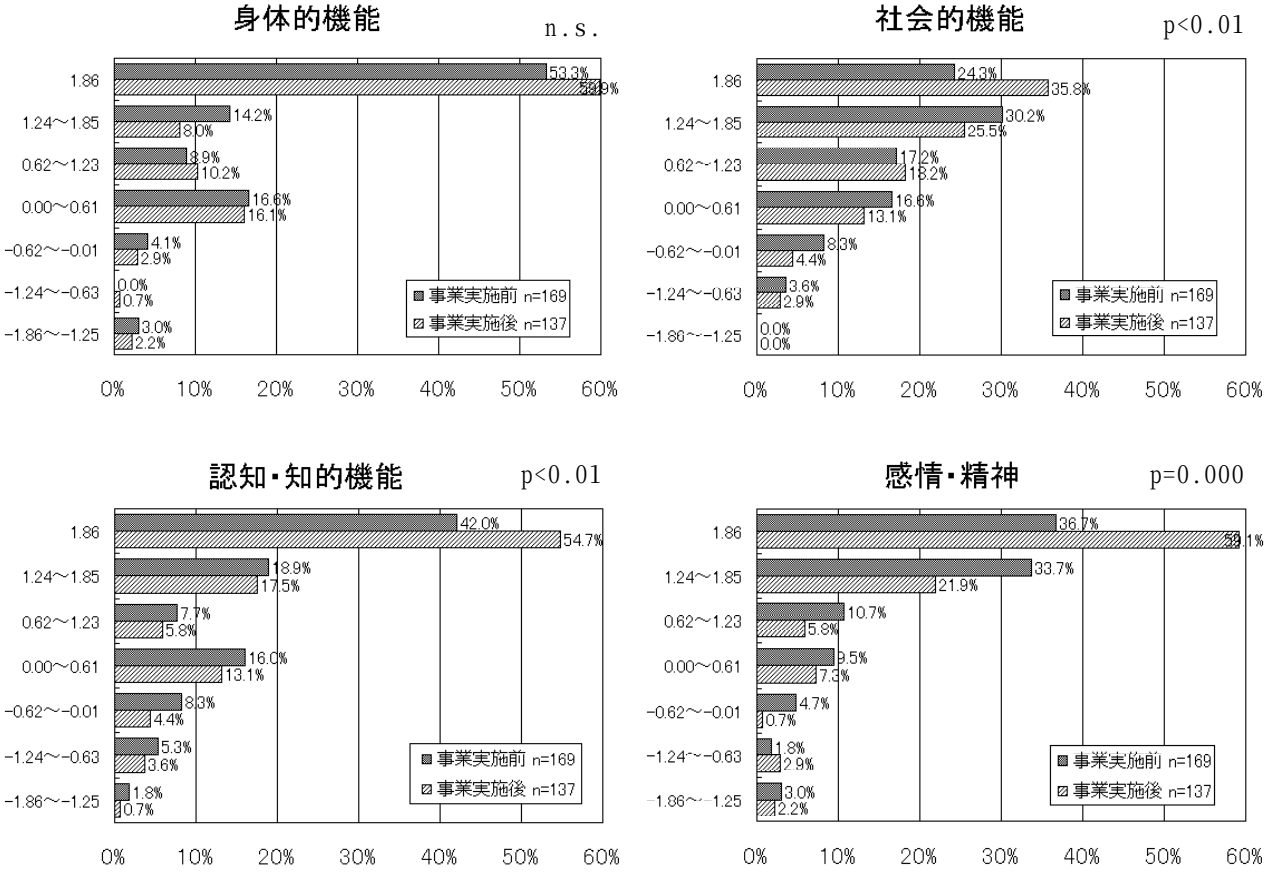
○自分から人に話しかけ、社会的交流の機会を持とうとするか。
○他人からの話しかけや社会的交流に対して口頭で反応するか。

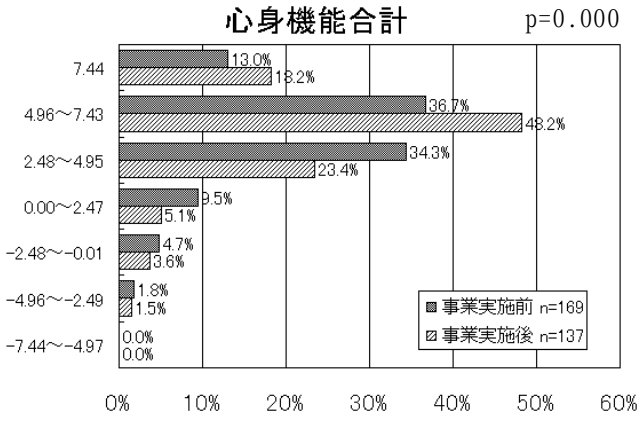
③　認知・知的機能

○話題や作業に注意を払うための声掛けは10分に１回以下であるか。
○自分の人生について説明できるか（誕生日、旧姓、職歴、生まれ故郷等）。

④　感情・精神

○本人が「自由時間に何をするかを自分で決定することができる」等の気持ちであるか。
○個人的なニーズを伝えることができるか。

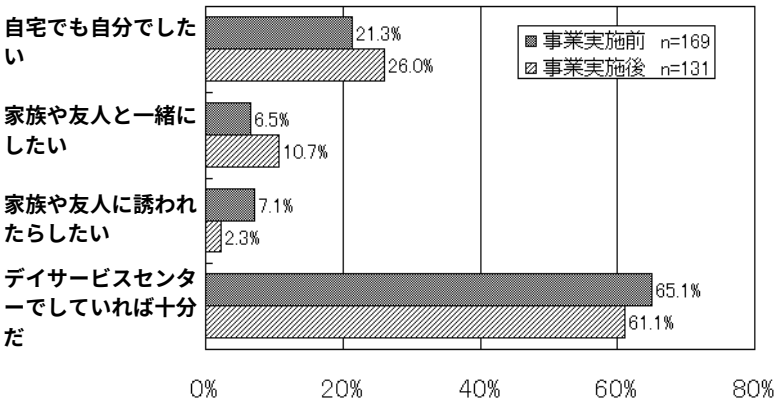




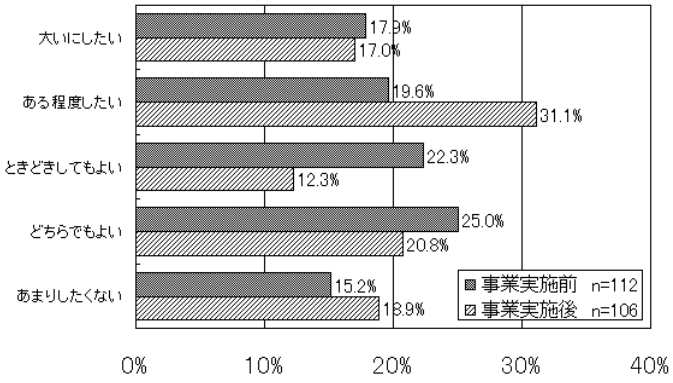
⑤　自宅での継続性

自宅に材料等を持ち帰って活動を続ける利用者が現れたほか、家族との会話や孫との接触が増加したり、自宅で活動の準備をしたりする利用者がいたなど、自宅で実際に施設での活動と同じことはしなくても、小グループ活動が日常生活の一端に組み込まれ活動の継続意欲が伺われた。

小グループ活動（レクリエーション）は自宅でどんなふうにしたいか。



⑥　日常生活行動の活性化

①～⑤により日常生活行動も活性化し、在宅における自主的な介護予防の取組が促進されたことが期待できる。

これから楽しい・やりがいがあることをしたいか。